

地域の底力

宮崎県児湯郡新富町

官民連携による チャレンジが導く 宮崎県新富町の未来

目指すのは、持続可能なまちづくり。
役場内の日常の改革から
住民の心や経済を動かす地域商社まで、
宮崎県児湯郡新富町では今、
さまざまなチャレンジが重ねられている。

宮崎県児湯郡新富町は宮崎平野のほぼ中央に位置し、町域の7割を平地が占める。主要産業は農業。町の中心地を囲むように田畑が広がり、ピーマンやキュウリ、トマトなど県内有数の野菜の生産地となっている。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

数年で大きく変わった 新富町の暮らし

宮崎県中部に位置する児湯郡新富町は、一九五九年に旧新田村と旧富田村が合併して誕生した。人口は約一万六〇〇〇人を有し、ピーマンやキュウリをはじめとする野菜、茶葉、稲作などの農業が産業の柱だ。一九五七年に航空自衛隊新田原基地が建設されて以降は、基地の町としても知られる。

一帯の歴史は古く、町西部の「新田原古墳群」には大小約二〇〇もの古墳が点在する。ホオリノミコト（別称は山幸彦）の物語のほか、神話にまつわる場所も多い。

町長の小嶋崇嗣氏は県外、海外での生活を経て二〇代後半で故郷であるこの町に戻り、約一〇年間

にわたり町議会議員を務めた後、二〇一八年から現職に至る。

「久しぶりに町に帰ってきたとき、ほぼ景色が変わっていないことに気付く、このままではいけないと思いました。スポーツ観戦や美術館を訪れるような楽しみを地元では経験できないのも気に掛かっていました」

小嶋氏の思いは、宮崎市、西都市とともにJ3リーグに所属する「テゲバジャーロ宮崎」のホームタ



上／テゲバジャーロ宮崎（右）とヴィアマテラス宮崎のユニホーム（左）。
左／テゲバジャーロ宮崎のホームスタジアムである、ユニリーバスタジアム新富。



「ミクロが変われば、マクロが変わる。日本の将来をいい方向に持っていくには、地域が変わっていく必要があります」と話す町長の小嶋崇嗣氏。

ウンになることで実る。二〇二一年には、ホームスタジアム「ユニリーバスタジアム新富」が完成した。二〇二〇年に創設され、WEリーグ（日本女子プロサッカーリーグ）参入を目指す女子サッカーチーム「ヴィアマテラス宮崎」とともに「地元のチーム」への応援の声は高まっている。

また、役場内では就任直後からデジタル化を強力に推進し、コロナ禍以前からリモート会議や書類のデータ化が行われてきた。町内の魅力発信の仕組みとして、二〇二一年に公式LINE「Sーあぷ」をスタート。町外からの利用も多く、登録者は約二万二〇〇〇人を数える。二〇二二年十月には、町民

税のほか各種税金をインターネットで口座振替ができる「Web口座振替受付サービス」を開始した。数々のあらたな取り組みが進む中で最も広く注目を集めるのは、二〇一七年に発足した地域商社「こゆ財団（一般財団法人こゆ地域づくり推進機構）」の存在。熱い思いを抱いた役場職員の発案から始まり、前町長の土屋良文氏のもと小嶋氏が議員時代から進めてきた事業だ。

「無駄を出せない、失敗できないのが役所の仕事です。しかしながらそれでは地域の活性化や人材育成、空き家対策、定住促進といったこれからの課題の解決は難しい。役所と対等に話し合えるパート



航空自衛隊新田原基地周辺には、飛行風景を目当てに航空ファンが数多く訪れる。基地関係者の異動に伴い、新富町の小中学校では他の地域からの転入が頻繁にあり、「多様性を受け入れる素地が、子どもたちにできている」と町長の小嶋氏は語る。

ナーとして両輪となって動き、さらにはお金をきちんと稼いで町に利益をもたらす団体を思い描いていました」

もともとイベント等の開催を担っていた観光協会を解散しての



「古代人のモニュメント—台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観—」として2018年に日本遺産に登録された、新田原古墳群の一角、新富町の「百足塚古墳」。複合施設の新富町総合交流センター「きらり」では、埴輪などの出土品を展示している。新田の名は、ホオリノミコト（山幸彦）が土地を切り拓いた伝承に由来。（埴輪の所有：新富町）

人が動き、経済が動く 持続可能なまちづくり

決断であり、「こゆ」の名は町の中だけではなく、児湯郡全体への広がりを意識してのことだ。

こゆ財団代表理事を務めるのは、シリコンバレーのITベンチャー企業での勤務を経た後、国内で数多くの地域創生プロジェクトを手掛けてきた齋藤潤一氏だ。

「僕自身の個人的なミッションは、ビジネスで持続可能なまちづくり。縁があつて役場の方たちとお会いした際、その目指す方向が同じだと分かりました。役場の本気度を感じた上、動きにはスピード感があり、小さい町ならではの良さを生かせるとも思いました」

そう話す齋藤氏が代表理事に就任した際に掲げたのは、「世界一

チャレンジしやすいまち」というビジョンだ。

「これまでの経験から、地域に足りないのはチャレンジの総量だと思っており、総量を増やせば質に転換できるという考えに基づいてのビジョンです。一方でそれを実現するためには、財団のスタッフの雇用を守らなければいけません。まずは何とかして、自分たちでお金を稼ぐ必要がありました」

齋藤氏は自ら町の事業者を訪ね歩き、商品開発やブランド化、販路の開拓を模索。こうした活動が実を結び、財団が手掛けるようになって以降、ふるさと納税寄付額は約四億円から一五億円に増えて



上／こゆ財団代表理事の齋藤潤一氏が地域づくりでの軸にするのは、松尾芭蕉が説いたといわれる「不易流行（変わらない本質的なものの中に新しいことを取り入れていく）」。「新しいことにより、古いことが再評価される状況を常に意識しています」

左／こゆ財団のオフィスの看板に描かれた「新富」の文字は、書道家の武田双雲氏の手によるもの。通学路に立っているため、子どもたちは自然と一流の作品を目にすることになる。



こゆ財団の創設時は、オフィスも資金もなく、JR日豊本線・日向新富駅内のバックヤードを間借りし、机や椅子、パソコンをはじめとする備品は、中古品でまかなった。その後、財団のチャレンジの一環で待合室をリニューアルし、現在は子どもたちの勉強の場やコワーキングスペースとして活用されている。

いるほか、新富町の強みである農産物のインターネット販売もスタートした。

興味深いのは、その売り上げの六％（現在は八％）を町に再投資する仕組みが、当初から取り決められていたこと。それが空き家を

右／新富町商店街で毎月第3日曜に開催される「こゆ朝市」。左／初回の2021年に続き、「新富ウェルビーイング芸術祭2022」を10月末～3月に開催。アーティストによるパフォーマンスや、ワークショップが行われた。(写真提供：こゆ財団)



利用した新規店舗や朝市といったイベントの開催など、多岐にわたるチャレンジにつながり、その売り上げからさらなる再投資に向けられ、経済が循環してきた。人材育成のためのセミナー開催も、積極的に行われている。最初のうちは否定的な声も聞かれたそうだが、状況は変わりつつある。

「やれることは全部やった、という感じです。失敗の数のほうが多いと思いますが、それは無駄ではなくプロセス。再投資は点から線面になっている。私がイメージするのは、財団を中心にアメーバ状に物事が広がっていく展開です。一人ひとりが個性を発揮して事業をつくる自立分散。その軸は経済です。人が動けば、経済が動きます。財団のスタッフが間に入って町の事業者や経済が動きだしていることが、今は可視化できるようになったと思います」

現在スタッフは、新富町の地域おこし協力隊を含めて三〇名。Iターンあり、Uターンあり。それぞれの背景や得意分野も多種多様だが、自由な発想で提案し、実行に移せる環境を喜んでいる。その

思いが、隊員たちの言葉の端々から伝わってきたのが印象深かった。

例えば、地域おこし協力隊として働く甲斐隆児氏は「こゆ財団は面白いことをやっているらしい」とのうわさに惹かれて参加した一人であり、アート関連の事業計画を提案して採用された。甲斐氏が

加わったことで、オフィスには美術館のごとく多数のアートが飾られ、それは町民の楽しみにもつながった。二〇二二年から始まり、アーティストを招いてのイベントやワークショップが行われる「新富芸術祭」では、進行管理役を担う。齋藤氏自身のチャレンジも続く。

「今後、必要なのは選択と集中。特に地域の特産物や資源を生かして、しっかりと持続可能な経済に変えていくことが大切です。そのためには、財団自身が持続可能なモ

新鮮な野菜をはじめ地元の食材を主役にした古民家カフェ「ごはんとかフェ78 (ななはち)」もまた、こゆ財団の活動から生まれたチャレンジの一つ。



森哲也氏が手掛ける森緑園のライチは、ゴルフボールよりも大きなサイズ。新鮮な果実は、果皮をむいた瞬間に果汁があふれ出るという。

デルになることが大事です。初期の財団スタッフが土台を支え、新しいメンバーがまた新しい刺激をもたらすような人の循環を生んでいかなければいけません。雇用を守り、町をさらに成長させることができる人が出てくれば、僕は喜んで今の役割をお譲りいたしますし、そういう人を見つけていく必要があると考えています」

ブランド化が生んだ あらたな町の特産品

こゆ財団によるブランド化により脚光を浴びた農産物の代表格が、有限会社森緑園が栽培する一粒一〇〇〇円のライチだ。代表の森哲也氏は、その発端を振り返る。「洋ラン栽培の傍ら、父が苗を育てていたライチが実り、それを口にしたところ、感動を覚えるほどおいしかったんです。香りが強く、

酸味と甘みのバランスもすばらしく、衝撃的でした」

当時、沖縄や鹿児島でライチの栽培が行われていた



が、国産品の流通はわずか一%。国内生産者は少なく、事例があっても露地栽培が基本だった。そのため、ハウス栽培を目指す森氏は徹底した温度管理など独自で試行錯誤を重ねる。

七年越しの努力は、こゆ財団の

ふるさと納税の返礼品となるのは、糖度15度以上などの基準をクリアしたライチ。傷みやすいため、一つひとつ丁寧に梱包される。(写真提供：こゆ財団)



下／すっきりとした輪郭の中に梅の風味がふくよかに立つ梅酒「座論梅」(右)と、ふっくらやわらかな甘みで飲む人を魅了する甘酒「稲倉」(左)。甘酒の名は、原料の米が栽培され、ホオリノミコトの伝承が多く残る、新田伊倉地区のかつての名称。より多くの人に希少な国産ウイスキーを試してもらうために量り売りを行うなど、伊藤氏は店舗においても独自のチャレンジを重ねる。



「こゆ財団が誕生してから、他の地域から来る若い人が増えました。彼らと話していると面白いし、とても刺激になりますね」と、伊藤酒屋の伊藤寛人氏は話す。

設立のタイミングと重なった。糖度とサイズの規定を設けた上での、一〇〇〇円という価格を設定。それで受け入れられるのかとの懸念はあったものの、ふるさと納税の返礼品となり、注文を制限するほどの人気を呼ぶことになる。美味の証しだ。財団との連携により販路が開拓できただけでなく、菓



減農薬での日本茶栽培から小売りまで一貫して手掛ける「夢茶房」。町内には茶畑も多い。

子店などに卸すといった広がりもあったという。

「おかげさまで宮崎県内では、お土産や贈答品として浸透してきているようです。初めて食べる方は、その味わりに驚いて顔色が変わりますから、新富町をアピールする存在になつてほしいですね。ライチの旬は五月の下旬から六月と短期間で、その限定感もまた魅力になっているのかもしれない。一〇〇〇円でも採算はぎりぎりのラインですが、きちんとおいしいライチを出したいので今も必死で栽培に取り組んでいます」

地域の資源を利用した斬新な新商品の開発

行政とは異なるこゆ財団の自由なスタンスは、国指定の天然記念物「湯之宮座論梅」を梅酒にするという意外な活用にもつながった。

湯之宮座論梅は樹齢六〇〇年とも言われ、湯之宮の名は神武天皇が湯浴みをしたとの伝承に基づいている。

発案したのは創業一八九二年の老舗、伊藤酒屋五代目、伊藤寛人氏。伊藤氏はそれまで、東北地方などに幾度となく足を運び、仕入れの難しい通垂涎の焼酎や日本酒の銘柄を扱うようになっていた。それを目当てに、遠くから訪れる常連客も多い。

「とはいえ都市圏とは異なり、小さな町では銘酒をそろえただけでは食べてはいけません。長年、店を支えてくれた町のために何かしたいという思いもありました。都会の人ができないことは何だろうと考える中、実は地元之宝物があると気付きました。その一つが、湯之宮座論梅です。子どもたちが



後の神武天皇(となるカムヤマトイハレビコノミコト)が東征の途中に立ち寄り、湯浴みをしたとされる「湯之宮神社」内の「伝説神武天皇湯浴跡」(上)。2月に花を咲かせる境内の湯之宮座論梅は、神武天皇が突き立てた杖から芽吹いたともいわれる。

(下・写真提供:新富町)

授業の一環で収穫するぐらいで、梅の実がそのまま土に返ってしまふのはもったいないと思っていました」

湯之宮座論梅で梅酒をつくりたい。こゆ財団が運営する人材育成塾で伊藤氏は、そうプレゼンテーションをした。その後、新富町やこゆ財団、宮崎県綾町の商品メーカーの力を借りてその思いは実を結ぶ。二〇一九年に梅酒「座論梅」を販売。初年は一〇〇本、豊作だった二〇二一年には約四〇〇本を仕込んだ。だが、チャレンジはそこで終わったわけではない。

「地元の宝物を使い、何か次のものを考えたときに思い浮かんだのが米。甘酒づくりでした」

二軒の米農家の協力を得て、商品企画から連携して誕生したのは、地元産一等米コシヒカリでつくつ

AGRIST 株式会社代表取締役兼最高技術責任者の秦裕貴氏と、Lサイズのピーマンを収穫する農業ロボット「L」。「人が食べるものを提供できる喜びとともに収入を得て生活ができる農業は、ホスピタリティーの高い仕事。心と経済的な豊かさのバランスの両立に、ロボットが役立てるのではないかと考えています」



地域の利便性を生かした 農業ロボットの開発

新富町の主要産業である農業に関して、AIを駆使した農業ロ

た甘酒「稲倉」。ホオリノミコトにまつわるストーリー（前ページ左上写真キャプションを参照）を付加できたのもまた地域のたまものだ。「アルコールが入っていないため、卸も自分で担えるのが魅力。農産物の直売所やふるさと納税の返礼品など、販路は広がっています。何よりも、地元の農家と一緒にものづくりができたのが嬉しかったですね」

伊藤氏は今、さらに次の商品開発を目指しているという。

ロボット開発にも熱いまなざしが注がれる。

二〇一九年に設立されたAGRIST株式会社で代表取締役兼最高技術責任者の秦裕貴氏は、北九州市の高等専門学校を卒業後、校内でロボット開発の企業を立ち上げた。その後、齋藤氏の講演への参加がきっかけとなり、新富町に移住してこの事業に関わるようになったという。

「新規就農を考えていたくらい、もともと農業には惹かれていたんです。そうした中で、役場の積極的な姿勢や、地元の農家と連携するこゆ財団の活動を知り、何か面白いことをやれそうだと感じたのが転機になりました」

秦氏のもと、移住者を含めた約二〇名のスタッフが取り組むのは、

つり下げ式のロボット

「L」の開発。

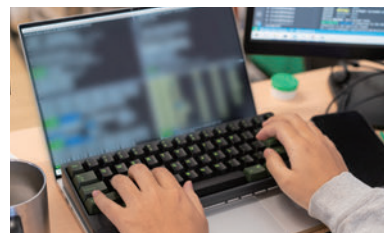
AIが新富町の特産品であるピーマンのLサイズのみを識別して摘

む機能。そして、そのロボットの形状が名前の由来になっている。

「新富町に事業所がある強みは、農業の現場に深く入り込めること。技術者を集めるだけなら首都圏のほうが簡単ですが、ここでは農場が近いので、開発段階での検証や実験、トライ・アンド・エラーがスピーディーにできます。また、農業の現場は四季折々で状況が変わり、その状況しだいでは管理や見回りなど生産者が自動化を望む作業も変化します。一年を通し、それを肌感覚で実感できるのは非常に大きいですね」

後継者や新規就農者が減少し、効率化が求められている現在、農業ロボットへの期待や関心は高い。

「われわれが目指すのは、低コストかつシンプルで限定的な作業ができるロボット。一方でそれぞれの農



AGRISTのオフィスは元は地元の量販店だった建物を活用している。日々の開発と検証に際しては、障がい者を雇用する宮崎市内の企業との連携が進んでいる。

家にはポリシーがあり、栽培方法も違います。ですから種類のロボットではフィットしない場合もあり、そこに対してどこまでサポートできるか、あるいはロボットを使うための栽培方法の標準化に、自分たちが説得力を持たせられるかがこれからの課題です。そのためには、まずは自社で栽培方法を研究する必要があるとの思いから、ロボットの使用が前提の農業生産法人「AGRIST FARM」を立ち上げました」

技術的なことのみならず、未来を見据えたその幅広い視点により、二〇二三年十月には経済産業省等が主催する「ロボット大賞」において、農林水産大臣賞を受賞した。

「農業は課題が多い分野ですが、その分、解決する楽しさや可能性があります。農業に興味があつて、

行政サイドでは、二〇二一年に一般社団法人「ニューアグリベール」を立ち上げて農業にさらなる力を注ぐ。その目的は企業誘致だと、町長の小嶋氏は話す。

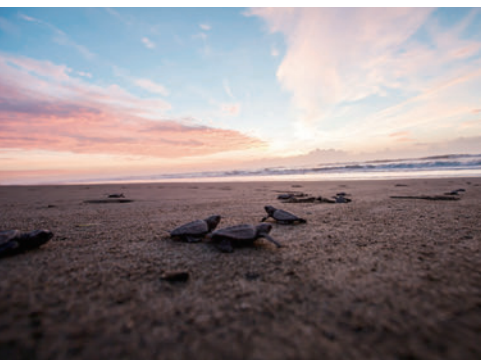
一〇年、二〇年先を見据えたまちづくり

自身のバックグラウンドを生かして新しい農業をしていきたい、そういう人たちを取り込めるような、新しいスマート農業の担い手を育成する仕組みもつくっていききたいと思っています」



すくすくと伸びたパームツリーも見られる新富町は、写真のトマトやブロッコリーなど、野菜の生育に適した温暖、多雨、多照な気候。国内で最も早い時期に実る、早場米コシヒカリの産地としても知られる。

日向灘に面した「富田浜」は、絶滅危惧種であるアカウミガメの産卵地。例年夏の初めから終わりにかけて、産卵が行われる。（上・写真提供：新富町）



「農業に参入したい企業のためにスタートアップの圃場（農作物を栽培する場所）を整備し、現時点では数社が名乗りを上げています。現状、日本の農業人口は減少しているにもかかわらず、収穫量は変わっていません。この背景としては農業法人の従事者がサラリーマンとして数えられていることも影響しています。彼らも農業を支えているのです。新富町に土地を求めてもらいたい大規模農業を行ってもらうことで、就農あるいは農場管理など農業に関わりたい人たちの受け皿になる、そして、企業も連携を始めてさらに広がっていくば……シリコンバレーならぬ、アグリバレー構想です」

大きな構想が描かれる一方、役場内では日常の改革も行われた。「この町に住んで良かったと思える、幸福度を上げる、その礎になるのは役場の対応です。職員には、窓口で町民の方が前に立たれたら必ず挨拶をしないと就任直後から言っています」

役所の対応は事務的なことが多くだけに、小嶋氏の言葉には新鮮な驚きがあった。

「こゆ財団を含めて、住民の皆さんに新しい取り組みを短期間で理解してもらうのは正直なところ容易ではありません。時にはよそ者が入って何をしているんだらうといった不信感が生まれる。もちろん広報活動は積極的に行いますし、ご意見を聞く間口は広がります。その上で、最終的には、一〇年後、二〇年後に『ああ、そうだったのか』と納得してもらえるまちづくりをする必要があると思っています」

高齢者の移動に配慮した町営バス会社を設立したい。小嶋氏の語る未来にも興味を刺激された。

「とりあえず二〇年間は持続可能な、化石燃料に頼らないバス会社を考えています。二〇年と区切っているのは、やがてはバスも自動運転になると考えられているからです」

官民それぞれの既成概念にとらわれない発想と、チャレンジを生むエネルギーにより、新富町の景色はどう変わるのだろうか。時を一气に駆け抜け、物語の先を見たくなった。



富田浜から続く日向灘沖の黒潮は、新富町に温暖な気候をもたらす。